
黒神いるかの転生生活

akane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒神いるかの転生生活

【Zコード】

Z0860V

【作者名】

akane

【あらすじ】

めだかボックスの世界に、しかも主人公の双子の姉として転生した黒神いるか。

心配性な姉と変態な兄、そして過保護な妹に囮まれ育つたいるかが異常に過負荷に悪平等に特別に普通に学校生活を謳歌していく。

これはそんな物語。

序章（前書き）

前の小説が気に入らなくて消しました a k a n e です。
反省も後悔もせずに新しく連載を始めました。
めだかボックスの二次創作小説始まります。

俺は、昔からツイでなかつた。

母親は俺を生んで直ぐに死んだ。

それでも一心に俺を愛してくれた父親も、リストラされ絶望の中首を吊つた。

叔母夫婦のところに引き取られたら、暴力暴言の雨露。

好きだつた女の子は同性愛者だつた。

こんなにツイでない俺でも顔は結構整つてる方だから、女の子にはまあまあモテてた。

結構告白とかされてたんだぜ？

けど、

「これで貴方は私のものよ……！」

流石にこれは予想してなかつた。

あれ？

俺はストーカーに殺されたんじや……。

『あう

へ？

『あ～……だつ！』

何で喋れないんだ？

何で手がこんなに小さいんだ？

何で足が短くなってるんだ？

何で首が据わってないんだ？

何で隣に赤ん坊がいるんだ？

『うえつ…おきゅあああーー！』

何なんだ一体！

黒神いるか（ ）

黒神めだかの双子の姉であり、転生者。

箱庭学園一年十三組。

十三組の十三人の補佐役であり、次期候補生。

黒神めだかと双子でありながらも、容姿的にはあまり似てない。

類似しているのは、髪の色と異常さだけであり、体格的にはむしろ不知火半袖や人吉瞳に近い。

ありとあらゆる境界を操るスキル「ノット・モノクロ」を所要する。過保護な妹や変態の兄をどうにかしようと常日頃解決策を考えている。

同性愛者じゃないのに、同性にモテるのが最近の悩み。

唯一の癒しは人吉善吉らしい。

第一箱（前書き）

夏休みだから更新頑張るぞー

第一箱

「いるか姉

『あうー？』

俺は転生とやらをしたらしい。

しかもめだかボックスの主人公、黒神めだかの兄妹という立ち位置に、だ。

いや、それは良いとしよう。

何で双子の“姉”なんだよ！

元とは言え、男だぞ俺は！

「だから、……って、聞いてるのか？」

『んみゅ』

あつ、聞いてなかつた。

原作はちょっと友人から聞いたくらいで全く知らない俺だが、この主人公が凄いという話だと言うことは知っている。

現に、まだ一歳なのにこんな流暢に言葉を話している我が妹。三歳の兄と二歳の姉の二人より身長が高い。

凄まじいこと言つたか恐ろしこ成長の早さである。

ちなみに、そりゃ俺は普通だ。
身長は赤ん坊の平均身長と同じ。それ以下だし。
まだ、言葉もマトモに話せない。

まあ、前世の知識と記憶がある以外は至つて普通の一歳児だ。

「……私は一体何のために生まれて来たのだろうか」

『あだつ』

「……そんなこと、普通の一歳児に聞くなよ。

これから大丈夫なのか、我が妹よ。

俺は小さく溜め息を吐いた。

そして、前ページから更に一年が経つた。

早いだろ?でも、一歳までに大したイベントが無いんだよ、仕方ない。

『姉ちや』

俺は三歳の姉、黒神くじらが閉じ籠つている部屋へ向かった。
姉ちゃんが何をして、それが姉ちゃんの意思なら構わない。
けど、拷問みたいな生活を送る姉ちゃんに目も当てられなくなつた
のは事実だ。

「…何だ、お前かよ。何のよつだ」

冷たくやつ言い姉ちゃん。

思ひそだね、この家の住人つてホントに濃いよな。

『お姉ちゃん、こっしょに遊ば』

ギコッと姉ちゃんの服の裾を引つ張る。

ナビ、その手は冷たくはね除けられてしまつた。

「ひめせー、俺は不幸じやなきや駄目なんだよー。」

『じや、じやあー、私がお姉ちゃんを幸せにあー。』

「ふわけた」と囁ひなー。』

ふざかてなんかないー、ひつひつ姉ちゃんに抱き着いた。

『お姉ちゃんは私のお姉なんだもんー、私が絶対に幸せにするんだもんー。』

強くわうわう。

姉ちゃんの皿を見つめると、姉ちゃんは腹心地悪ひつて皿を逸げた。

『いやーんじー、飯食べなきやダメー、遊ばなきやダメー、もつと寝なきやダメー。』

離せーと姉ちゃん。

俺の手から離れようと暴れるが、意地でも離したりするもんか！

『私、お姉ちゃん大好きだからーお姉ちゃんが笑ってないと嫌だからー』

「……」

『お姉ちゃん……』

ボロボロと勝手に流れる涙。

いくら前世の知識があるうと、精神的にもやつぱり子供もなのだろうか、止めようとしても止まらない。

「……ケツー俺はポリシーを曲げるつもりはねーよ」

『お姉ちゃん』

「けど、まあ…可愛い妹のお願いくらいは聞いてやらねえこともねえ！」

『ー』

姉ちゃんのその言葉に止まらなかつた涙が引っ込んだ。

「で、何だつけ？遊び？ほひ、ひとつと外行くわ」

『…ひんー』

黒神いるか、一歳。

どうやら姉の説得に成功しました。

第一二箱（前書き）

書子ひやん句愛こよ書子ひやん

「」指摘があつたので書き直してみました。

改めて考えると二十のひとつとの内一箇つめだがちやんに比べた
うつよつと運が良いく程度ですね

俺と妹のめだかは初めてのお出掛けをすることになった。

お出掛け と言つても、買い物とか旅行だとかではない。

俺達の異常を調べるため、病院へ行くのである。

めだかはともかく、俺はそんな田立つことしないんだけどな。
妹のめだかがあまりにも異常だから、念のためなのだろうか。

「いるか姉」

ふと、隣に座つて いるめだかが俺を呼んだ。

周りを見ると、まあ見た目からして濃い、異常そうな奴ばかりだ。

『んー?』

「もしかしたら、私の生まれた理由が分かるかもしれない」

めだかは異常だ。

極めて健全に普通に一般的に育つた俺とは正反対で、不健全に異常に非一般的に育つた。

そんなめだかを大人達は気味悪がつた。

勿論、家族の俺や姉ちゃんは（兄ちゃん？俺に変態な兄はない）
は気味悪がることなく彼女といたが、それでもやはりめだかからす

ると世の中は下らなく見えたんだろう。

異常に育つためだかには、普通や特別が愚かに見えたんだろう。

『うん…きっと分かるよー』

「『分からぬよ』」

俺がめだかに言うと間髪入れずに、めだかとは反対側の隣から否定の言葉が掛かった。

『え?』

「『君も大人も外れだよねえ』」

隣を見ると、そこには不気味な兎の人形を持った不気味な男の子。

待合室にいる他の患者とは違つて、別に変なところはない。
けど、何かが不気味で気持ち悪かつた。

「『人間は無意味に生まれて』『無関係に生きて』『無価値に死ぬに決まってるのにさ』」

『……』

「『世界には目標なんてなくて』『人生には目的なんかないんだから』」

そつ言い残して、男の子は診察室に入つていった。

『……めだか?』

俺が声を掛けてもめだかは存在しない男の子の背中をずっと見つめていた。

まるで、その言葉に感銘を受けたかのよう。

『めだ　　「黒神いるかちゃん。」一番診察室に入つてくださいー』
あつ、はーい』

めだかが心配だつたけど、呼ばれたからには行かなきゃいけない。俺は言われた通り「2」と書かれた診察室に向かつた。

「黒神いるかちゃんね。私は君の担当医になる人吉瞳一よりしくね
めだかが心配だつたけど、呼ばれたからには行かなきゃいけない。
だつた。」

診察室にいたのはめだか見ても小学生くらいでありますかの子?女性?
だつた。

『あの…私、どこか悪いんですか?』

一応、年齢は一歳なのでたゞたゞしく喋る。
子どものつりつて結構疲れるんだぜ?』

「…いや、まだ分からぬわ」

ところが、俺田立つ!としてないじやん。
俺が異常なわけないよな。

…まあ、良いや。適当に一歳児らしい受け答えしてりや、普通と
診断され　　「といひでこるかちゃん。くじ引いてみない?」

瞳先生が指したのはよく福引とかで使われるガラガラと回して玉を出すあれ。

何の意図があるのか、先生を見つめても早く回すよ／＼催促されただけだった。

金色が出ませんよー』。

『えいっ』

ガラガラと音を立てて回すと、出たのは黒。

『うう……黒だ』

ラッキー！と心中で叫びながら、一応ガッカリ（したフリを）しつべ。

黒い玉を先生に『はいっ』と差し出すと先生は神妙な顔をしていた。

「……もう一回やつてもらえるかしら、いるかちゃん」

『？ いいよー』

黒い玉をガラガラ（あれ正式名称何なんだろうな）の中に再度入れ直し、もう一回やり直す。

黒だった。

念のため、と言われてもう一回やり直す。

黒だった。

『…黒ばっかりだ』

「いのちやん

『なーに?』

「そのくじね、黒は253個の内、一個しかないの」

空気が凍つた気がした。

『……え?』

「君は間違いなく異常よ」アブノーマル

だ、騙されたー!

「君には妹のめだかちやんと一緒に通院してもいいわ

第三箱（前書き）

書子ちゃんスキー様がいて興奮しどります、 a k a n e です

あれから、俺とめだかの通院生活が始まった。

同じような質問をされ同じような返答を返して同じような「異常通院」の診断をされる。

その繰り返しに俺達 基めだかの精神は参っていた。
参っていた、だと語弊があるな。

嫌気が差した、と言つて良い。

ある日、いつもの様に待合室で自分の番が来るまで待つてると、めだかが「脱け出そう」と言つて来た。

大人を絶望させたり失望させて来ためだかだけど、大人に盾を突いたのは初めてだ。

「おい！12番と13番 黒神いるかとめだかはどこに行つた！」

「？」

俺達が逃げ出したことで騒ぐ大人達。

大分大事になつてしまつた。

『ど、どつするの？』

「一先ずあそこに逃げよう

そつぱつてめだかが指差したのは託児室。

ほどぼりが冷めるまで、俺達はそこへ逃げ込んだ。

部屋にいたのは、男の子一人だった。
周りに色んな玩具があり、その内の一つなんだろう知恵の輪を力チ
ヤ力チヤといじっている男の子。

めだかは“挨拶”をしようとした子に声を掛けた。

「おい、何をそんな単純なパズルに手こずりておるへ貸せ」

それ子どもの玩具奪つただけじゃね?
とはシシ「まない。俺も空氣を読むのぞ。

『めだかー…。これ出来ない』

その子に言われるままにパズルを全部解くめだかに、そつぱからや
つてゐるに全然出来ないルービックキューブもついでにやつてもら
つた。

勿論、それもめだかは解いてしまつた。

「す」「す」「…君はすつ」「…や…」

『えへへ、めだかは凄いんだよー』

ピョンピョン跳ねて喜ぶ男の子にのろけとく。

「……凄くなんかない。それに凄くたつて何にもならない。私が生
きてることに、私が生まれたことに、何の意味もないのだから

『もーっ、まだそんなこと言つてゐるのめだか!』

「えー? そつかなー? 」この世に意味の無いことなんてないと思つけど?』

と、男の子は首を傾けながら言つた。

それでも溜め息混じりにつまらなそつにめだかは言つた。

「私は一体何のために生まれてきた? 」と。

男の子は満面の笑みでめだかに返した。

「そつと君は、みんなを幸せにするために生まれてきたんだよ! 」

「これが俺達と、生涯の友人となる人吉善吉の最初の出会いである。

『んー、箱庭学園ねえ…』

俺こと私（女の子）の子りしくなるよう特訓中である）、黒神いるかが立つは箱庭学園理事長室。

あれから中学でもまあ色々あつたけど俺 失礼、私とめだかは幼馴染みの善吉と共に同じ学園へ入学した。

ちなみに、めだかも私も一年十三組。

入学して早々に生徒会長になつためだかだけど、私は裏腹に授業にマトモに出席すらしてない。

元々、十三組には登校義務からないんだしね。

そんな訳で、今日も箱庭学園校舎を闊歩としといふと放送で理事長からお呼び出しが掛かつたのである。

何だろ、私は基本何もしないからめだか関連かな？

そう色々と考えながら私は理事長室の扉を開けた。

「ふふ、そうかしこまらないで下せー」

『…えへへ、流石に理事長先生の前じゃ緊張しますよ

…相変わらず食えない爺さんである。

「そういえば、理事長って不知火と血縁関係にあるんだよな。
似てるところ、頭のアホ毛しかくなね？」

「今回、こーゆかさんを呼び出したのは少し実験に協力して頂きたくてですね」

お茶を啜りながら、頭のアホ毛を揺らす理事長。
どうなつてんだろ、あれ。

『実験ですか？理事長先生の望む結果を私が出せるとは思えませんよ？』

「いえいえ、そう言わないで下さい」

ただの老人の戯れですから と理事長が出したのはサイコロがいっぱい入ったグラス。

瞳先生のことを思い出すなー。

理事長に振るよう催促されてしまつたので、適当に幾つか掘んで机の上に投げてみる。

ヒヨウ

「これは……！」

おー。サイコロでピザの斜塔が出来た。

うん、ダイスの斜塔と並付けよう！

「（サイコロが角で立ち、更にその上に他のサイコロが積み重なる

など…重力的にあり得ませんよ!」……流石です、いるかさん。アナタは妹さんにも負けず劣らず異常です」

『いえいえー、私がどれだけ頑張つても、どれだけ運が良くても、めだかには勝てませんよ』

めだかは異常とか普通とかそんなレベルじゃないからなーあの子。

「ところで、いるかさん。アナタにちょっと相談があるのですが…

…

『はい?』

第五編（前書き）

さあ町のジャーナリストって来ました。

処理ちやん可憐こよ処理ちや……ひがつ、浮城じやないんだ書子ち
やん！

「む、いるか姉ではないか。探したぞ」

『ん、めだか。何か私に用事ー?』

理事長とのお話が終わってまた私が校舎内を散歩していくとめだかに遭遇。

相変わらずのワガママボディで羨ましいよ。

『いるか姉、生徒会役員になるつもりは『断る』:何故だ』

即答すると「スッとした表情でめだかは質問して来た。

結構誤解されがちだけど、めだかは「喜」だけでなくちゃんと「怒」「哀」「樂」も持つてるんだぜ?

『めだかのことだから善吉も生徒会に入れるんじょー?それで私も入つたら独裁政治じゃん』

最もらじごとを並べるけど、ぶっちゃけ面倒なだけ。めだかは大好きだけど、騒動に巻き込まれるのは嫌いだからね。

『うむ…その通りだが』

『応援だけさせてよめだか』

「ソリと笑つておく。

過保護というか妹バカというか、めだかは私に甘いから無理矢理生徒会に入れさせようとはしないだろ。

「…分かつた。生徒会に善吉に入つて貰つ」

『うん、頑張つてね!』

「その代わり…少しせき合つてもいいやー。」

『え?』

ガシツ

え、ちよ、

『何処行くのさめだかー!』

「俺は絶対!生徒会には入らない!」

なるほど、善吉を誘い 基、誘拐しに来たのか。

にしても、善吉も素直じゃないなあ。

「…つたぐ、普通に連れてくるつことが出来ねーのかよ。生徒会長さー」

『何言つてんの、善吉。めだかに“普通”なんて出来るわけないじ
やん!』

酷い言い分かもしれないけど、実際そつなんだよね。
何でも出来るめだかも“普通”な行動だけは絶対出来ないんだから。

「カツ！それもやつだな！」

「善吉もこるか姉も、そう冷たいことを言つた。そして、善吉。そうよそよそしい呼び方せずに昔のよつにめだかちやんと呼ぶが良い！」

凜つ！とめだか。

毎回思うんだけど、あの効果音どうやつて出でんだろう。

「カツ！そりやキツイのは分かるけどなーだからって俺を巻き込むなよ！」

何か善吉が言つてゐるけど、めだかは総スルー。

聞いてるどころか、いつもの間にか脱いでるよ。いつまで経つてもあの露出癖は直らないんだよなあ。

「少なくとも小六まで私達と一緒に風呂に入つていた男の言つ」とではないな

「昔の話だ！」

『や、そんなに認めたくない思い出なんだ……酷いよ、善吉』

およよ、と泣く（フリする）私。

ちなみに、今でもたまーにめだかとは一緒に風呂入るぜ。姉妹だもの。

「…いるか姉を泣かせたな善吉？」

「お、おこーびつ考へても泣き真似だろ今の一いるかひやんも嘘だつて言つて ギヤアアアアー！」

南無阿弥陀仏、だよ善吉よ。

君の死は無駄にしない。

『わういえば、めだか。目安箱改めめだか箱、設置したんじょ？』

「うむ、早速第一号の投書があつたぞ」

『見せて見せてー』

【拝啓 生徒会長様

実は二年の不良達が剣道場を溜まり場にしていて困っています。
どうか彼らを追い出してください。

よろしくお願ひします】

『…剣道場？』

第六箱（前書き）

書下りやんに食べられたいよお

『ふーん

不良を追い出してくれ、の投書に従い剣道場にやつて来た私とめがかと善吉（結局ついて来てるし）。

剣道場には、お世辞にも一般生徒とは言えない不良共が屯っていた。

『ひやー、これは酷い有り様だね』

剣道場だと言うのに、剣道着を来てる奴なんか一人も見当たらない。この学校、私服登校は禁止だろ確か。

「あ？ 誰だア お前ら」

「一年十三組生徒会長執行部会長職黒神めだかだ」

『同じく一年十三組黒神いるかでーす』

自己紹介をしたところで、めだかが「田安箱への投書に基づき、生徒会を執行するー」と言つ放つた。

けども、まあやはりと言つべきかゲラゲラ笑い見下しながら挑発してくる不良組。

タバコ臭いから正直喋らないで欲しいよね。

『リセッショ』

「んなつ……て、てめえ！」

「……いるか姉、何をしておる」

『タバコの臭いをリセッショウしようかと』

タバコの臭いをブンブンさせて校舎歩いてたら風紀委員会に取り締まられちゃうからね。

厚意で掛けたんだから感謝してくれよ？

「まあ確かに、タバコだけは控えておくが良い。貴様達の健全な成長を阻害するし、何より将来の楽しみが無くなるぞ！」

スッとめだかが扇子を広げたかと思つたら、その上には煙草が積み重なつていた。

無刀取りならぬ、無煙草取りってか？
いつの間に抜き取つたんだか。

まつ、そんな技とか術とかめだかにとつては人を助けるために必要な力の一つにしか過ぎないんだろうなあ。

「哀れなことだ。貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている。何か重大な理由があつて挫折を経験し、道を踏み外してしまつたとしか考えられん」

おおー出た、黒神めだかの真骨頂その？上から目線性善説！

数ある真骨頂の中じや、あんまり珍しいものでもないけどな。

「親に見捨てられたか？よき師に出来なかつたか？友に裏切られたか？安心しろ。私が貴様達を更生させてやる。剣のこと以外何も考えられないようにしてやる。矯正してやる強制してやる。改善してやる改造してやる。一度とだけよつなどと思えぬよう、泣いたり笑つたり出来なくしてやる。まずは素振り1000回からだ！貴様達、今日は歩いて帰れると思つなよ！」

『めだかカツコイー』

『…ねえねえ、めだか』

「何だ、いるか姉」

『何をしてるのかな？』

「剣道場の掃除だ」

『いや、それは分かるんだけど……』

『何で私まで付き合わされてるのかなー？』

『こんにちわ、皆お馴染みの黒神いるかだよ。

不知火と買い食いしてたら、我が妹めだかに拉致られてしまつた。しかも何故か剣道場に。

曰く「連中が練習に励めるよつこ」「だとか。

……相変わらず、的外れのよじで的を得てる子だ。

『「つあー、面倒だなあ』

ちょいちょいとスキル《ノットモノクロ》で汚いと綺麗の境界をいじつてバレンの程度に掃除をサボる。

めだかにバレたら「自らの手でやるから」の意味があるので…「とか怒られちゃいそうだしねー。

『「どうかさ、めだか。依頼の内容は「不良を追い出せ」でしょ？更生させたところで、依頼は解決出来なくない？』

「…簡単な話だよ、いるか姉。連中が更生した時点で、不良などどこにも存在しないだろ？』

『「……なるほどね』

ホント、めだかは見てて飽きないや。

「な、何イイ！？」

『「お、善吉来たんだ』

「遅いぞ善吉。稽古開始の時刻はどうに過ぎどおる。遅れた分、帰りが倍は遅くなると心得よ！」

『「まーまー。善吉は一組だから大変なんだよ』

登校義務が無いから授業すら無い私等と違つて、善吉はちゃんと授業受けてるんだから仕方ない仕方ない。

「しかし連中も遅いな。最近は時間にルーズな者ばかりだ」

ちゃんと叱つてやらんとな、と続けるめだか。

最近つて言つたつて私等も最近の若い者の内の1人だぜ？

「遅いも何も来るわけねーだろ？が！道場掃除すりや連中が心開く
とでも思つたのか！？大体、お前何でここまでしてんだよ！あんな
連中、お前にとっちゃ見知らぬ他人だろ？」

おいおい、善吉。

愚問の中の愚問だよ、そんな言葉。

「私は見知らぬ他人の役に立つため生まれてきた」

……こんな言葉がめだかからり出るよつになつたのも、善吉のおかげ
なんだけどなあ。

忘れてんのかな？

『あつ、善吉！』

あんだけ批判してた不良組が道場に胴着姿で来たことで善吉は拗ね
てどつかに行つてしまつた。

剣道なんかしたことないし、私が不良組に教えることなんて無いの
で善吉の後を追いかける。

うあー、善吉つて結構足速いからなー。

『おひ、いたいた善也』

グシャアッ

『……』

「つたく…。ホンシートーアテにならねえ生徒会だよなあ。僕は追い出せつって頼んだんだぜ？雑草育ててどうすんだよ、アホが！」

あれは確か善吉のクラスメイトの日向だつけ？ひねくれてるなあ。

『ちよつとー、私の幼馴染みイジメないでよー』

「お前…！あの化け物会長の…！」

『そうそ、黒神めだかの双子の姉の黒神いるかですよー。ねえねえ、知ってる日向君？』

一寸先は闇つて言葉。世の中は何が起こるか分からないうち意味なんだってさ。

というより、日向君の場合は、

『田と鼻の先に闇　　の方が合つてるかな？』

『ギツ、ギャアアアア…！…！』

第七編（前書き）

宿題めんどー！

書けいやんが可憐に過去世に生めるのが辛い

『結局生徒会入ってんじゃん!』

あの後、私は少し日向君と遊んだ。

田向君、剣道三倍段とか持ってるらしいけど体力無いんだねー、すぐ疲れて眠っちゃったよ。

勿論、保健室には連れてったさ。

赤さんめちゃめちゃ驚いてたけどな。

んでまあ生徒会室に来てみれば、あんだけ入らない入らない言つてた善吉が『庶務』の腕章を腕に巻いてるのだ。

最初からいひなるだらうなとは予想してたけどね。
相変わらず、素直になれないんだから善吉は。

「おわつーなんだいるかちゃんかよ…」

『何だとは失礼な。んで、善吉は何生徒会制服着て鏡の前で唸つてんの?』

端から見たら凄い変な人だぜ?

「いややー、やっぱ俺に黒は似合わねえと思つてさあ

だから制服白のこの学校来たのに……と善吉。

善吉からしたら学校の選ぶ基準は私やめだかがいるかいないかより、

制服が白か黒かなのね！

「ナニコレ訳じやねバナビよ。ハーン、やつぱつサマになんねバ

『いやいや、結構似合つてるよ善吉君』

「つむ、善吉には黒が良く似合つ

「どうわづー

いつの間にか私達の背後に立つてためだか。

驚いてる善吉をスルーして、内側にジャージを着るといふことを言った。
いやいや、流石にそれはちょっと……。

「チツ、チビルかつけー！

ええ～…。中学の時から思つてたんだけ、善吉ってセンス悪いよ
なあ。

意にも介してないめだかと呆れてる私を余所に善吉は一人興奮して
る。

「田安箱をチェックしてきたぞ」

『新しい投書でもあつたの？』

「ああ。どうやら今回せめりとて出でつてあるよつだな

「あの…」めんなさい。本当はこんなこと、下級生のあなた達に相談するようなことじやないかもしれないんだけど、剣道場のこととか友達から色々聞いて…」

『ほうほう、陸上部の一年九組有明先輩ねえ。

「遠慮はいらん、構えるな。私は誰の相談でも受け付ける…」

「（何でこいつ上級生に敬語使わないんだろう…）」

「（何でこいの「」、生徒会でも無いのにこいこいこいなんだ？…）それで相談つていつのはこのことなんだけど…」

そう有明先輩が出したのはボロボロに切り刻まれたスパイクと、切り抜きで「陸上部やめろ」と書かれた紙。

『うわあ

イジメってのは陰湿だねえ。

特に女子のは見てるだけで泣けるぐらいだよ。

有明先輩曰く、今度の大会で短距離走の代表に選ばれたことが原因だとか。

『つてことは陸上部の3年の女子かなー？』

「え？」

『有明先輩がレギュラーに選ばれたのはこれが初めてなんですね？だったら、前回までレギュラーだったのに有明先輩と入れ替わっ

て落ちてる人がいるはずじゃないですか。同級生からのただの妬みとかより、そっちの方が現実的であり得るんじゃないでしょーか』

「そ、そつか！じゃあ犯人は一気に限られ 』

「しかしだな、いるか姉。実質的な証拠はまだ何もないのだ。状況証拠だけで他人を悪人と決めつけるのは良くないぞ』

有明先輩の言葉を遮つて私をたしなめためだか。

そう言つと思つたよ。

『だ・か・ら、核心となる証拠を掴みに行くんでしょーが！』

めだかほどじやないにしても、私だつてイジメみたいな卑怯なことはあまり好きじやないんだぜ？

ちょっととばかし、犯人には痛い目見てもらわなきやね。

という訳で来るグラウンド。

不知火の情報網のおかげで、私達は簡単に容疑者を見つけることが出来たのである。

「んで、どうするんだよいるかちゃん。物的証拠なんか警察でもねーんだし集めようがねーだろ』

『ん？簡単だよそんなの 』

『諫早三年生、貴様が犯人か？』

『めだかの手によつちやね』

いやあ、まさか本人に直接聞きに行くとはねー。
姉である私もちょっと驚いたよ、うん。

「あ、逃げた！」

『逃げない方がおかしいけどね』

コナンの犯人でもあるまいし、バレた途端自供し始める人間なん
ていないでしょ。

『…うーん、走るの好きじゃないし、帰ろっかなあ』

「あつ、じゃあお嬢様ー。一緒に買い食いでも行きません?」

『おつ、良じねー。ミスド行こうよミスド』

この後不知火と仲良くミスドに行きましたと、ちやんちやん。

第八箱（前書き）

つしづあああおらあ！

更新してやつたぜつしゃあ！

という訳で、第八箱更新しました。

明日は書子ちゃんと海に行くので、次の更新は明日の深夜か明後日になります。

『子犬探し?』

めだかボックスこと日安箱を管理している善吉。

曰く今日の投書は三件らしい。

バスケ部部室の普請要請と学食の新メニュー開発、そして子犬探し。
確かにめだかは何でも相談しろって言つたけど何でも屋じゃないんだよ生徒会はー?
まつ、生徒会役員でもない私が言えた身分じゃないかあ。

『はいはい!子犬探しは私がやる!』

「……では、学食の件は私が担当しよう。善吉はバスケ部の件を、
いるか姉は子犬探しを頼む」

『オッケー、任せてよー』

めだかは動物苦手だからね、子犬だろ?と子猫だろ?と向いてない
だろ。
しかも、子犬つて言つたつて犬種はボルゾイ。
絶対成長してるだろ?から善吉にはちょっと難しいね。

『……と思つて言い出したのにさあ…。何でいるかなあ?』

「カツー! カツー! かちやんにだけカツコトイ役させれつかよ!」

不知火と私と、そして善吉。

何で私が気を遣つてあげたのに来ちゃうつかな。

「さあ、不知火！早く俺達を案内するんだ！その心当たりの場所とやらにな！」

「ああ……うん……いいんだけどね、別に。……そのテンションキモイな……」

不知火に引かれるつて相当だよ善吉…。

正直、私もかなり引いてるぜ。

テンション高い善吉は死ぬ程ウザイなあ。

「ちょっと前から学園内に住み着いてる犬がいるらしいってだけなんだけど。えーっと、確かこの辺に……」

不知火の案内に付いて行つた先には秋月先輩の言つていた犬と模様が同じ“成犬”。

そりやあ、去年の冬休みにはぐれたんだもん。 そうなるわなあ。

『大丈夫、善吉？無茶しなくても私がやるよ』

いくら獰猛とは言え、犬は犬だしね。

めだかみみたいな化け物じやあるまいし、やれないことはないでしょ。

「い、いや……！」

「へーえ。人吉君、帰るんだー？あんだけ強気なこと言つといて、女の子に全部任せます』すゞ帰っちゃうんだー？なつさけない

「

『ちょ、ちょっと、不知火?』

「…あー分かったよー行きやー良いんだろ、行きやーー!」

不知火いいいい!余計なこと言つなよおおおおおー!

「あつ、待つて人吉!」

余計なことしどかしちゃつた不知火は善吉を引き留めソーセージを差し出した。お昼御飯らしい。

お昼にソーセージ?

餌付けに使つて!なんてキャラもしてないでしょ不知火は。

「これをお腹のトトに仕込んでね『ぎやああー内臓を食われたー!…と見せかけて実はソーセージでした』ってギャグやって欲しいの」

で・す・よ・ね。

正に外道やで不知火。

同じ人間とは思えないね!

「…クソッ。やっぱ俺がやるしかねえのか。とりあえず貸せ!」

そう言つて善吉はソーセージを奪い、それを左手に虫取網を右手に犬に向かつていった。

が、あえなく失敗。

勿論、さつき言つてたドッキリもガチで食われて……はないか。

「ああステキ!ステキ!人吉くんてば超ステキ」

パシヤパシヤと「写メを撮る不知火。

『…不知火つて本当に人間?』

「もつちろん!」

…人間つて怖いなあ。

「えー、というわけでございまして。不知火と一緒にターゲットを発見するも捕獲には失敗。その後の逃走を許してしまいました」

「…なるほどな。しかし善吉よ、子犬探しの件はいるか姉に任せたつもりなのだが?」

『それがさー聞いてよめだか! 善吉つたら自分が目立ちたいがために、私の仕事まで横取りするんだよー?』

まつ、私生徒会じゃないから仕事とか無いんだけどね、本来。

けど、ほら、せっかくの厚意を無下にされるのは傷つくじゃん?

「ち、ちげえよ! あー… そんでだ。一年投書主の秋月先輩にも会つてみたんだけど、それがいかにも感じやすそうな娘さんでさ。 とて もじやねーが現状は報告出来なかつたよ」

THE・お嬢様つて風貌だつたよね。

何にせよ、色んな人間がいる学校に冬休みとは言え、犬を連れて来ちゃマズイでしょ。

犬アレルギーの人だつているんだし。

『あの犬ボルゾイは狼狩りのための狩猟犬で、時速50kmを超すこともある犬の中でも俊敏な犬種だよ。本当ならかなり人懐っこい筈なんだけど…野生化して性格まで変わっちゃったみたいだね』

地球上で一番強い動物は犬って言われてるくらい犬は強いからね、普通『善吉』にはちょっとキツイ相手なんだよな。なのに『コイツは……まつたく。

「カツー…どりで手も足もでねーわけだよ。」

ソーセージ『内臓』は出たけどね。

「まあ、つつてもほつとくわけにはいかねーよな。このままじゃ保健所が動きかねねーし」

「保健所？」

『うんうん。でもまつ！心配しないでよめだか。この件は私と善吉、不知火とで解決してあげるからさ』

「不知火と？」

「……やはりその件、私が動こうつー。」

『え』

『めだか、それってまさか…』

「うむ、演劇部から押借してきた」

めだかが持ち出したのは犬の着ぐるみ。

確か演劇部が次の劇で使う予定の衣装である。

「さて、あやつがターゲットか

めだかが横目でボルゾイを見る。

グルグル唸つてる犬を見てめだかは「可愛い」と言い放つた。

素晴らしい感性だね！

早速、ターゲットに向かつためだかだけ、ボルゾイは「きやいん！」と叫んでどこかに行つてしまつた。

『あ～あ…』

「…逃げちまつたな」

「ワンちゃん…ワンちゃん…」

凄いショックを受けてるめだかを善吉に任せ、私は犬を追いかけた。面倒だけど、あの犬が人を襲う方が面倒になりそうだしね。

『…見つけ』

校舎裏の端の端。木陰に隠れてガタガタブルブルと震える犬。どんだけ怖かつたんだよ。

『キミをご主人様のところに連れてつてあげるよ？さつきの怖い人から助けてあげるよ？だから、ほら。ここちにおいで』

そう優あしく（ここ重要。凄い大切だからね）声を掛けて、手を伸ばす。

すると、犬は仰向けになり尻尾を股の間に挟んでブルブルと震え始めた。

所謂、“降伏”。白旗の証拠である。

『…めだかの時は逃亡で、私の時は降伏か。やれやれ、私達双子はどうも動物には好かれないみたいだ』

勿論、犬は飼い主のところへお渡しました。
子犬の時より大人しくなつたつて先輩が不思議がつてたけど、人間も犬も成長したら大人しくなるもんだよね

第九箱（前書き）

あわわ、ご主人様！
投稿出来ちゃいました！

はい、恋姫+夢想なら星が大好き a k a n e です。

書子ちゃんと海行こうとしたら書子ちゃんに合つ水着がなかつたので、図書館テートになりました。

書子ちゃんがいたらどこでも私は幸せだよ書子ちゃん！
といつ訳で、出来た暇で作つてみた話です。

『何がご用ですか理事長先生』

また呼び出しをくらつた私。

理事長室には理事長が待つていて挨拶も早々にお茶を出された。

「いえいえ、いるかさんと少しあ茶をしたいなと」

『はあ…まあ、それはいいんですけど』

覗き見されるつてのはあまり良い気分がしないので、止めても
らつていいですか？

私がそう言つと、いきなり現れた“ようく見える”七人の男女。
全員面識はないが、その内の1人は入学したての私でも知つてゐる有
名人だつた。

雲仙真利。10才という若さで一年十三組に所属する異端児。風紀
委員長で、彼を敵にした時点で箱庭学園では生きていけないとまで
言われてる。

『（なんか随分と濃いメンバーだなあ）こちらは?』

「…十三組の十三人。^{サーティン・バーティー}以前アナタにお伝えした“フラスコ計画”的
実験体『協力者』ですよ」

『私のことを見るためだけに集まつたつていう感じではなさそうで

すけど?』

理事長に聞く。

しかし答えたのは理事長ではなく、その後ろにいる七人の一人である男子生徒。

「君は実に聰明なんだね。 殺したくなる」

男子生徒はそう言つといきなり私に向かつて銃を発砲した。しかし、やはり、

『そんな簡単に死ねる程、暗い人生送つてないんで』

空間の境界（私はこれをスキマと呼んでる。移動やら収納やら発送やらに使って結構便利）を作つて弾を全部別の空間に送つた。細かい場所指定はしてないけど大丈夫大丈夫。

「ふん。なかなかやる様だが、王を前に立ち続けるとは無礼にも程があるぞ。 跪け」

『お前が跪けよ』

「――――?」

何だよ、この人。

先輩っぽいけど、自分のことを王とか腹筋死ぬわ。電波にも程があるだろおい。

命令されてもそれを守る義務は私には無いんで命令し返す。

理事長含めその場にいる全員が跪いた。

『 で、もう一回聞きますけど、この人達は何の用があつて覗き見してたんですか、理事長?』

「うぐ……あ、新しく十三人に入るアナタの品定めらしいですよ…!
!それより、いるかさん…早く解放してくれませんか…ね?」

『 ん? ああ、もう良いですよ』

すっかり忘れてた。
めだかと私つて双子の癖に全然似てないけど、記憶力も大きな違いだよね。

『 この後、不知火に学食奢る約束してるんですよ。用が済んだなら、帰つていɨですか?』

財布家に忘れて来ちゃつたからとりに戻らないといけないしね。
電波と同じ空間にいたら私まで電波になりそつなんで。

「え、ええ……」

『 じゃあさようなら。理事長先生と先輩方』

うーん。銀行で卸してきた方が良いかなあ。
不知火つて容赦無いからなあ。

…… そういえば、包帯で顔グルグル巻いてた女人。どこか懐かしい感じがするんだけど、気のせいだつたりするのかな?

「……どうですか、新しいお仲間は？」

「……僕の銃『僕らしさ』が全然効かなかつた。彼女なら、僕の友達になつてくれるかもしない」

「俺はあの女の能力に興味があるな。銃弾を避けてねえのに、当たつてない！異常中の異常としか説明がつかねえな」

「ケツ！妹の方が化け物かと思つたら姉貴の方が化け物じゃねえか！噂以上だぜ黒神いるか！」

「……黒神いるか、どつかで聞いた気がすんだよなあ」

「王土さんの『言葉の重み』を使つたことは凄いと思うし、私はああいう子嫌いじゃないよ」

「良いんじやないかな？思考が読めないことは驚いたけど、あの子がいたら大分プラスコ計画も進むと思うよ」

「……」

「王土？」

「初めてだ、偉大なる俺が敗北するなど。初めて、負けた。……俺が王なら、アイツは神ということか……ふつ」

「あひやひや、お嬢様風邪ー？」

『夏風邪かなあ』

「夏風邪はなんとかしかひかないって言つよねー」

『……どういう意味かな?』

「あひやひやひや、何でもなーい!」

第十箱（前書き）

はい、難産でした。

どれだけ難産かと言ひど、胎児が足から出てしまひて、難産でした。

私が唸つてた間にお気に入り登録が100件越しどう！
ちょっと嬉し過ぎて阿波おどりしましたね。

しばらくしなかつた更新ですけども頑張ったのでよかつたら読んで
やつしてください。

プルル…プルル…ガチャツ。

『はい、もしもし?』

「おー、いるかちゃん? 久しぶりやね」

『…入学説明会以来ですかね、先輩。今日はどういった用件で?』

「いやなに、キニの妹ちゃんに頼みたい事があつてなー。伝言を頼みたいんよ」

『めだかにですか? 別に構いませんけど……頼みたい』とつて?』

「ククク! 妹ちゃんにとつちや朝飯前つてとこやるな。我が部の後継者決めを手伝つてもらいたいんよ。簡単やろ?』

『まあ、めだかなら大丈夫でしじう。じゃあ伝えておきますね』

「ん。頼んだで」

『ええ、それじゃあまた放課後に。 失礼します、猫美先輩』

プツッ。

……私、あの人に携帯の番号教えた記憶が無いんだけど、何で知つてるんだろう。

『 柔道部の後継者決め、か。今回も私の出番は無さやつだな
柔道部つて言つと、アイツに会つことになるからなあ。
猫美先輩に挨拶だけして、帰ろつ。』

『と、言つわけだよ』

「それよりいるかちゃんは服を着ろー。」

善吉が着替え中に入つて来るからいけないんじやないか。
ノックは基本。親しき仲にも礼儀ありだぜ？

「と、いうか、私はいるか姉が鍋島三年生と面識があることに驚いて
おる。いつ知り合つたのだ？」

『んー？去年の入学説明会にだよ。迷子になつてたのを助けてもら
つたんだよね』

尊敬してゐるし信頼出来るけど、あの人卑怯だからなあ……。

反則王つていうか卑怯王つていつか。

毒盛つたりだとか事故起こさせたりだとかはしないんだよね、あの
人。

あくまで“努力”で潰したいからか、人道的な問題かは分からない
けど。

「まあ何にせよ、行つてみようではないか。柔道部といえば懐かし

い顔にも会えるだらうしな

『……』

だから、行きたくないんだよめだかよ……。

「やー やー よういひや いらつしゃ いませー ウチが差出人ー 柔道部部長の鍋島猫美ですー 本日はぞー ゼよろしくー。」

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをさせてもううぞ」

柔道部を訪れた私達 正確にはめだかに話しがけてきた猫美先輩。私も挨拶しておいた方が良いのかなこれ。

『お久しぶりです、猫美先輩』

「こらかちやんもわざわざありがとなー。助かるで」

『いえいえー』

世間話？ではないな、めだかに今回の依頼について簡単に内容を話す猫美先輩。

しかし途中で思い出したかのように「挨拶したいゆー奴おんねん」と話を遮った。

『げつ……』

呼ばれて更衣室から出てきた好青年（私にはキザ男にしか見えないけど）は善吉には田もくれず私とめだかのところに来た。来んなや。

「」無沙汰しております、めだかさんいるかさん。生徒会立ち上げの大事な時期にお気をわざわせてはいけないと」以下略。話長い。とにかく、好青年こと阿久根高貴は長い言葉をすらすら並べて私達の前に跪いた。目立つから止めて欲しいです。

「……堅苦しい真似はよせ阿久根一年生。他の者が見ておるぞ。貴様ほどの男がそのように振る舞つては示しがつしまー」

阿久根高貴の態度にざわめく他の柔道部員。

まあ、実力だけはあるだろうからね、実力だけは。

『……猫美せんぱーい、もう帰つて良いですか？』

めだかと阿久根高貴が話してる隙に猫美先輩のとこに行く。私は嫌いで苦手で不得意なんだよ、阿久根高貴が。

「ククク！ジブン、ホンマに阿久根クン嫌いやなー」

まだ帰つちゃ駄目や、と先輩。

うあー、この人が相手じゃなかつたら早々に帰つてるんだけどなあ。

『そういえば、何でわざわざめだかに後継者決めなんか？外部者より部長の猫美先輩がやつた方が良いんじゃないですか？』

何でも出来るめだかだけど、あくまで部外者。

本人は名前だけの部長だとか言つてるけど、内部者の猫美先輩より適任なわけじやないよね。

「んー？いやなに、ちょっと欲しいモノがあつてなー」

『はあ……？』

うーん、何が言いたいか分からなーなあこの人は。

「まずは鑑定してやう、貴様達の値打ちをな。我こそはと思ひう者から駄乗り出よ。全員まとめて一人残らず！私が相手をしてやうつ！」

『ん、始まりましたね』

「ククッ！ナメられたもんやなー。我が栄光の柔道部も！」

『仕方ないですよ。姉の目から見ても、あの子と柔道でマトモに組めるのは猫美先輩と……認めたくないけど阿久根先輩くらいですから』

「こーゆかさんが俺のことを見めてくださつた……！」

『うわ、いつの間に！』

気付かぬ内に隣に並んでいた阿久根高貴。

近いわ、ムサイわ、暑苦しいわ！

酷い言い様？辛い当たり様？知るか！めだかと違つて、殴られても許してあげるほど私は優しくないんだよ。

一番最初に行つた副部長の城南先輩。

勇気あるなあ、めだかの赤帯見て躊躇無し

「ヒヒー！それにこれうつかりおつぱいとか触つちやつても不可抗力つてことでいいんだよなー！」

前言撤回。ある人にあるのは勇気じゃなくて下心でした。

「勿論だ」

はい、天誅。

流石めだかだなあ、相手に技をかけられるビリロカ袖・襟を取らせることすら許さないとば。

「流石だなめだかさんは。中学生の頃より更に輝きを増していく」

キラキラとオーラを撒き散らす阿久根高貴に善吉が呆れる。本当にコイツめだかのこと好きだよなあ。

正直、キモイぜ。

「なあ人吉クン。人吉クンはどない思つ？」

「…別に。あいつは中一で赤帯取得するようなバケモンなんですから。今更何しても驚きやしませんよ」

まー確かにね。めだかと一緒にいたら驚くことすら無駄だと思い知らされるね！

「ククク、そーかいそーかい。いや実はウチもおんなじ意見でな。化物言われようと天才呼ばれようと、あの口は“出来ることが出来るだけ”やろ？不可能を可能にしとるわけやない。極端な話、あん

なんウチらが普通に歩いとるんと変わらへん

『…………』

私も善吉も言葉が出なかつた。

団星：といつわけじやないけど、確かにそうだ。

赤ん坊と大人とを比べると大人の方が圧倒的に出来る」とは多い。けど、かと言つて大人が凄い訳ではないのだ。

だつて、大人にとつては“出来て当たり前”的ことなんだから。

「それに比べたら凡人のクセに天才に付き従つとうジブンの方がよっぽどスゴイやん。なあ？部活荒らしの人吉善吉クン？」

「……付き従つてるのは語弊がありますね。俺はあいつに振り回されてるだけですよ。生徒会だつてムリヤリ入れられたようなもんです」

『えー、「善吉が自分から腕章を寄せせと言つて来たのだ！」ってめだかが言つてたよー』

「ち、ちげえ！あればめだかちゃんが…」

「そりが、無理矢理だとほぞくか」

だつたら俺が代わつてやろうか？

そう阿久根高貴は私達の話に割り込んできた。

曰く、これまでめだかの同情心に免じて見逃してきたが、そろそろ善吉も独り立ちするべきだ、とか。

……阿久根高貴も、あの変態も、てんで分かつてないよね。

『資格だとか、すべきだとかで、善吉は私達と一緒にいる訳じゃな
いっつーの』

「？ いるかさん、何か仰いましたか？」

『イエイエ、別にー』

まあ、大好きな幼馴染みが馬鹿にされてるのは嫌だからね。
いつちょ阿久根高貴をぶつ倒そつか！ 善吉が。

「うん！ 人吉クンみたいな頑張り屋さんがウチはめっちゃ好きなん
よ！」

……拝見、人吉瞳先生。

どうやら善吉にも春が来たようで「何を言つてんだよいるかちゃん
！」

『大丈夫だよ善吉。猫美先輩なら君の努力を認めてくれるさ』

「そういう問題じゃねえから…」

……そりいえば、長年一緒にいる私だけど、善吉の好みのタイプは知
らないな。

今度聞いてみよう。

「ほんだら、ルールは柔道部恒例の阿久根方式な！無制限一本勝負対無制限一本勝負！阿久根クンに十本取られるまでに一本でも取れたらジブンの勝ちや、人吉クン！」

「んー、そつは言つたものの、柔道経験なんか零に近い善吉と阿久根高貴じや勝負にならないよな。」

善吉がどう出るのかが見物ですな

バンッ！

先手必勝と組みに向かつた善吉だけど、阿久根高貴に綺麗に投げられ受身すらも取れずに畠に叩き付けられてしまった。

『うわあ……あれば痛い』

背中から地面にぶつかると口から内臓出るような痛みに襲われるよねー。

しかも、あと九本（善吉が阿久根高貴に簡単に勝てるとは思つてない）つて……。

「あーさつすが阿久根クン。綺麗な一本やなー。後の先取らせたら右に出るモンはおらんわ。……ホンマ天才的でつまらん柔道や」

いつの間にか隣には猫美先輩が。審判やつてたんじやないのかアンタ。

『相変わらず天才嫌いですね、猫美先輩』

溜め息を吐きながら言つと先輩はおちやらけながら、

「うん、嫌いやで。大嫌いや。黒神ちゃんのことも阿久根クンのこともな。あ、いるかちゃんは友達やからノーカンやで？」

と私の頭をクシャクシャと撫でた。

「なるほど、流石柔道界の反則王は言つことが違う。あといるか姉を撫でるな」

むつ。めだかに抱き寄せられた。この子は相変わらずの嫉妬しいだな。

「ま、黒神ちゃん。天才は天才同士、凡才は凡才同士でつるもやないか。ウチの柔道に阿久根クンはいらん。ジブンにやるわ。そんかし人吉クンくれや。取り替えつこしよーで」

……これで九本。

阿久根高貴もめだかのことになると容赦も手加減もないよねえ。

「ふむ、ならば安心しろ鍋島三年生。天才などいない

「……は？」

『いやいや、めだかは充分天才だよ。天才過ぎるくらいに』

「む、そんなことはないぞ。私はただ良い運と環境の中、努力して来ただけだ」

『えへへー、じゃあ秀才つてとこるかな？』

……天才はいるんだよ、めだか。

努力で分身出来たり、フルマラソンを一時間で走れたり、書の道を三ヶ月で極められたり、十四歳で赤帯取得出来たり、猛獸を屈服させれたり、関数計算を暗算で出来たり、するわけないじゃん。

いや、もしそれを努力で片付けたら、出来ない人は努力が足りないってだけで終わっちゃうんだよ。

間違いなく天才は存在する。

それがどんな基準で判断されるかは私の知ったことじゃないけどね

ー

「善吉ー。」

『ん?』

「いきなり叫ぶめだか。フラフラな善吉に激励の一つでもあげるのかな?」

「いつ如何なる場合においても、決して私は貴様に負けるなとは言わん。だから勝つて！貴様がいなくなつたら私はすぐ嫌だぞ、困るぞ、泣いちゃうぞー！」

「あーー、もーーー。お前が泣くとこなんか見たことねえし、見たくもねえよーー！」

善吉はそつ声を挙げたかと思つと阿久根高貴の膝を両手で刈つた。

……リア充めが、爆発しろ。

『まあ、阿久根先輩の想いより善吉の想いが強かつたってことです
かね』

人間の想いつて強いなあ。

無意識の内にふつと口角が上がったような気がした。

番外編・黒神兄妹（前書き）

セエエエエエエッフウウウ！

投稿したで！

短いけど許してください。あ。
イナストがやりたいんです。イナズマイレブンが……

『めだかー、お勉強教えてー』

「……いるか姉、抱えてる物がゲーム機だぞ」

あれは、私とめだかが六歳で姉ちゃんと変態が七歳と八歳の頃の話だ。

いつも通り、屋敷でのんびりまつたりしていた私達を変態こと兄貴は甘ったるい声で呼んだ。

「こらかちやーん、めだかちやーん」

……大抵、兄貴が私達をセットで呼ぶ時はマトモな用事じゃない。いやね、兄貴がマトモなこと言つなんてありえないんだけどさ。

『……先週は抱き枕作るからって胸とか計られたね』

めだかとアイコンタクトを取る。
私達が出した結論は、

「『行かなくて良いか』

放置であつた。

「いやいやーお兄ちやんを無視するような子に育てた覚えはないよ

「？」

「育てられた覚えもありません」

『お兄ちゃんだと認めたくないです』

私達が声を揃えた瞬間、どこからか出てきた兄貴。聞こえてたのか。

兄貴はその両手にケーキの乗つたお盆を持っていた。

苺のショートケーキとモンブラン、それからチーズケーキ。

兄貴は甘い香り漂つたお盆を手に差し出して言った。

「べっぴんと食べて来なさい」

と。

ところがで、私達は短い短いお使い（家の中だけ）で出でないと
になつた。

といつても、所詮は家。

いぐり広くても別に問題もなく、姉ちゃんの弓削いもある部屋に着いた。

「姉ちゃん」

「…何だよ、ここは何の玩具も無いぞ」

呼びかけても、姉ちゃんはノートから話をすことなく対応した。

どうやら、私達がノックも無しにいきなり部屋に入ったことを咎める時間よりも勉強する方が大切らしい。
相変わらず勉強熱心な姉である。

『兄貴が三人で食べろって』

そう私はお盆を見せた。

姉ちゃんはチラリと私達を見たが、すぐに視線を戻した。

「…要らねーよ。俺の分もやるから一人で食べな

あ、勉強の邪魔だから外でな、と姉ちゃん。
シッシと犬猫を追いやるように手を払われた。

『…姉ちゃんが食べないなら、私も食べない』

「私もだ」

「はあ？何言つてんだよお前等

呆れたように、いや実際呆れてるんだろう姉ちゃんは回転式の椅子を回しそこで初めて俺達に体を向けた。

「…」

『…』

ディックと二人でお盆を見つめる。

食べたいなあ、私はモンブランが良いなあ、と思考がグルグル頭の中を巡るけど、姉ちゃんが食べないなら私もお預けだ。待てをせりれる犬の気持ちがわかつた様な気がした。

グウと小さくお腹が鳴つた。

そういうば、今日は朝から何も食べてなかつたんだつけ。
……ちよつとだけなら、と手を伸ばし　　駄目駄目ー姉ちゃんが食べないのに私が食べる訳にはいかん！

「……」

『……』

ああ、でもなあ……。

美味しそうだなあ、モンブラン……。

「ケツ、あーもう分かつたよー。」

「『ー』」

「俺は余つたので食いから早く好きなの選びなー！」

「『ー』はーーー」

勿論、この後三人でケーキを食べました。
兄貴？知らんな！

第十一箱（前書き）

うーん、中途半端な仕上がり

『……暇だなー』

どうもこんにちは、化け物生徒会長の双子の姉こと黒神いるかです。授業を行う先生も、一緒にお喋りするようなクラスメートもいないので、私は今ものつすごい暇です。いつも通りだけさ。

『めだかは校内清掃、不知火と善吉は授業中だしー。何か暇潰しになるものは』

視界に映つたのは

『… そりいえば、あんなのあつたなあ』

時計台でした。

理事長室曰く、フラスコ計画は箱庭学園の地下に広がる研究施設で行われているらしい。

それで、時計台の一階がその地下研究施設への唯一の入口だとか。本来私は面倒は嫌いなんだけど、今日はあまりにも暇過ぎるし?フラスコ計画とやらに勧誘されたから見学する権利はあるし?ちょっとした暇潰しになら?行つてあげないこともないよ?

『(まあ、あの包帯グルグル巻きの人気が気になるつてのが本音なんだけどね)じゃ、行きますか』

「「いらっしゃいませ」」

とこう訳で、やつて来ました時計台。しかしながら待っていたのは気になる人の人ではなく双子の男子生徒。なんだか、簡単には通してくれなさそうだ。

『「フ拉斯」計画の見学に来ましたー。あなた方は門番か何かで?』

しかし双子の門番は「無視して素通りしていくつてくれて構わないよ」と阻む気は無い様子。にしてもソックリだなあ。やっぱり双子って普通そうなのかな?私とめだかは全然似てないんだけど。

「……ちょっと、聞いてる君?」

『「ん?ああ、すみません』

聞いてませんでした、と反省も後悔もしてないけれど一応形だけは謝罪しておく。

双子は溜め息を吐きながらももう一回言つてくれた。

「「」の拒絶の扉を通りことが出来たら時計台地下へ入つていいよ」

「六桁の暗証番号を正しく入力すればこの扉はあつさり開く

「一度に通れるのは一人ずつー一人通る度に番号は変更される」

「通れる確率は百万分の一ー百万人に一人しか遠さないー故に拒

『長い扉…』

…長い説明ご苦労様です』こと。

この双子はあれなのか？登校義務が無い十三組に入ったのに、この扉の説明をするためだけに一日中ここに立つてゐるのか？

理事長も中々に良い性格してゐるな、流石不知火の祖父だわ…。

『…十三組の十三人とやらは毎日それをクリアしてゐるんですか？』

『勿論…』

「その程度の確率もクリア出来ない人間はフラスコ計画に関わる資格すらないのさ…」

『…や頬でそう言つ双子。
くつ、一発殴りたい。』

言つても始まらないから拒絶の扉とやらに手を伸ばしてみる。

…そういえば、の人ならこんな簡単出来そうだなー。
めだかも朝飯前だらうけど、の人は夜食前って感じ？
今何してゐるんだろ、の。一応受験生の筈だけど。

ガコンッ

『あ、開いた』

「…」「…」

『んー、じゃあ行きますか』

異常者の巣窟にね。

『おー、迷路かー』

早速、地下一階に下つた私。
え？ エレベーター？ エレベーターなんかに乗つたら暇潰せないじゃ
ん。

にしても迷路ねえ。

異常者の研究のための施設で何で迷路？ 侵入者が二階以降までに行
けないようになにかな？

……攻略として左手法なんかは時間が掛かる。トレモー・アリゴリ
ズムは目印を付けられるものが無いし面倒だ。

じゃあ、やつぱり……

『ハ回つてとこだね』

グルグルと腕を回す。本当この能力つて便利だよねー。

という訳で、邪道だけど

『正面突破と行きますか！』

目の前の壁の耐久の境界をちよつと弄つて壁をぶつ壊す。

『あれ、やり過ぎたかな？』

力を込め過ぎて、五・六通路分くらい穴をあけてしまった。力加減が難しいなこれ。

巡回 リッパー・サイクロトロン

HUNTER × HUNTERのキャラクター、フィンクスの能力である。

簡単に言えば、腕を回した回数の分、パンチの威力が上がるという何とも加減が難しい能力だ。

さて、じゃあ行きますか 「トレビアン！」

『一。』

速い。いや、早い。

全く気配に気付かなかつた。

確かにこの人理事長室にいた人だよね？
あからさま日本人じゃないんだけど……。

「俺は高千穂仕種つて言つんだけど、いやいや黒神姉、凄まじいぜお前！」

『……ちょっと怪力なだけですよ、高千穂先輩。』

うーん、マズイなあ。

別に戦うのが嫌いな訳でも苦手な訳でも無いけど、あんまり痛いのは嫌だ。

この人良い体つき（えつちな意味ではないよ）してるし、苦戦しそうだな……。

「あ、言つとくナビ別にお前の行く手を阻むとかそんな氣はねえ
ぜ」

えつ。

『そつなんですか?』

「次の十三人^{パーティ}の候補なんだろ? 好きなだけ見学していけば良いじゃ
ねえか」

何だ、案外良い人じやないか。

ドレッド頭に大量のピアスしてるから不良か何かだと思つてたや。

『それじゃあ、行かせてもらいます。失礼します』

先輩の言葉に甘えて背中を向ける。が、

『ただし、お前の能力には興味があるー。』

バギイツ!

殴られた。

第十一箱（前書き）

短い！しかし終わった！

『つてて……』

不覚にも背後からの攻撃を喰らつてしまつた私。
ダメージはそこまででもないけど、制服が汚れちゃつたよ。めだか
と違つて、私は今着てるこれと冬服しか持つてないんだから、止め
て欲しいな。

「…マジかよ。こちとら殺すつもりでやつたんだぜ？流石化け物生
徒会長の姉だな、黒神いるか！」

『…妹の方がよっぽど異常ですよ。で、何でしたつけ？私の能力？
教えれば通してくれるんですか？』

制服についた土埃を払いながら、化け物を見るような瞳で私を見る
高千穂先輩に返す。
あー、結構ひどいなー。めだかに怒られるかも。

「…ああ、そうだ！一応俺は研究者なんでな、弾丸を避けることな
く避けたお前の能力に興味がある！」

『能力なんて大袈裟なもんじゃないですよ。運良くあの先輩が外
してくれただけです』

「宗像がそんなことするわけねーだろ。アイツの異常性は殺人衝動
だぜ？」

『…ふーん

その割りには理事長室で喰らつた（喰らつてないけど）銃弾は頭や胸をわざと外してるように感じたけどね…。

『…とか、私の能力は科学的にも論理的にも解明されないものですから、研究者でも理解出来ないと思いますよ?』

他の人気が持つているモノが人より異常であるという異常者の皆さんと違つて、私は純粹な能力。

宗像先輩の殺人衝動や人に言つことを聞かせる（私の憶測だけど、多分電磁波を発する力が人より強いとかそこらへんんだと思う）電波な人の異常と違つて、私の能力でありノットモノクロは誰も持つていなからね。

人を殺したいと思うことは誰もあるし、電磁波は人間皆出している。
けど、境界を弄る能力なんて皆が皆持つてたら世界破滅するつ一つの。

「そりゃいそりゃい。ちなみに、お前のその能力つていうのは教えてもらえたりするのか?」

『別に隠すほどのものじゃないですから。私は境界を弄ることが出来るんです』

ありとあらゆる境界を。人と獣の境界を。人と家畜の境界を。人と神の境界を。人《普通》と化け物《異常》の境界を。人と人の境界を。好きな時に好きなところを好きなものを好きな具合に操る。

『…それが私の能力です』

「…おいおい、それは人間の領域じゃねえだろ」

えーそーうかな?

私なんかより球磨川やめだかの方がよつぽど異常でよつぽど化け物でよつぽどズルいと思つけどね。あの一人チート過ぎ。普通カワイソス。

で、能力を教えたんだから通らしてもらつていいですか? そう先輩に質問するが、先輩の答えはノーだった。

「ついてことはだーお前なら俺と喧嘩《殴り合い》出来るんだりゅー! ?」

『つわおつ』

私に向かって拳を振りかざす高千穂先輩。
勿論受け流す。

しかし、今度は左足が私の頭目掛けて向かって来る。

『つひと、ちょ、あぶな』

受け流しても、受け止めても、次々に高千穂先輩は攻撃を繰り出す。
危ない、危ないって!

「どうしたよ黒神いるかあー! 反撃しねえのかいー! ?」

『じゅあ、お言葉に甘え… てつー』

ひょー

『……ありや？』

思いつきり力を込めて先輩の顔面に拳を打ち込むとするが、簡単に避けられてしまった。

確かに私はあんまり戦えるわけじゃないけど、いくらなんでもこんなキツイ体制から避けるのは無理がないかい？

「（何だ、こんなもんかよ黒神…）おらあ！」

『「ふと…もしかして、高千穂先輩の異常^{アブノーマル}つて反射神経だったりしますっ。』

「「！」答へ！俺は生まれつき異常で過剰な反射神経の持ち主でな言つながらば自動操縦の戦闘機だ！」

「うわあ…マジかよ…。

戦いのための異常みたいなもんじやん。真っ向勝負で敵うわけなくね？

んー、殴り合いしたい高千穂先輩には悪いけど、ちょっとズルい手使わせてもらおうかな。

『大人と子どもの境界』

「ん？ 何を言つて なつ！」

ちょっととばかし高千穂先輩には若返つてもうつた。五歳つてとかな？

生まれつき異常な反射神経でも、攻撃力が低いんじや避けるだけだしね。

『私は戦つかないんで 先行かせてもらいますね、高千穂先輩』

「…今度は逃がさねえぞ」

『やだなあ、そんな怖い』と言わないでくださいよ。それに』

アナタの相手は今度来るであろう私の可愛い妹に任せますから。

そう言って私は今度こそ高千穂先輩に背を向けて地下一階に下った。

アンケート（前書き）

大して重要な話ではありませんが、良かつたら

アンケート

めだかボックスの1-1巻が発売されましたね。

それに便乗、という訳ではありませんが伴つて、アンケートを行いたいと思います。

簡単に言えば、この連載の落ちを誰にしようかという事です。

勿論、皆さんと同じで作者もめだかボックスに登場するキャラクター皆大好きですし、主人公と絡ませたいのですがいかんせん人数が多いすぎまして。

ハーレムにしてもせめて10人以下には絞りたいのです。

ルールというか規約は以上です。

- ・めだかボックスのキャラであること
- ・女性であること
- ・複数キャラへの投票も可
- ・しかし、一人のキャラに何回も投票するのは不可
- ・期限は今この時から三週間とする
- ・もし、そのキャラとこう絡ませたいこんな関係にしたいというのがございましたら一緒に記入を。出来る限りお答えしたいと思います

もしよろしかつたら、感想にて好きなキャラを挙げていってください。

PS・書子ぢやんだけは絶対書きます。異論は認めません。

第十三箱（前書き）

すみませんっしたあ！……！

久しぶりに書いた挙句、駄文と言ひ……。

いや、いつも駄文だけぢや。今回は特に酷いです、はい。

『地下で日本庭園つて一体…』

地下一階に下つた私が見たのは日本庭園。
こらまた随分と意図がわからないなあ。
空調やらを調えるだけでもかなり大変だろ?』

「ん? 寄人か?」

『…どうやら一階ごとに一人住人がいるみたいですね』

日本庭園には似つかわしくない服装をした正直見た目不良中の不良の男の人。

十三組の十三人の内の一人っぽい。

「ああ、理事長室が言つてたやつか。運が良かつたな、今私は機嫌が良いから通らせてやる。先に行きな」

『…いやあ、十三組の十三人の皆さんのお意見を鵜呑みにしたら痛い目見るっぽいんで遠慮します』

先に行くように顎をしゃくつて促す先輩だが、そつは問屋が卸さないぜ。
めだかと違つて私は疑うよ?私が信じるのは善吉とめだかと、…今
はいなけれど姉さんぐらいだもん。
えつ、兄貴?誰それ?知らんな!

「かーつー今時の一年は先輩の言つ事も信じないのか。世知辛いね
え」

『えへ、そこまで馬鹿じゃないですよー。ところで自己紹介と行き
ます?』

「にひひひひー化け物生徒会長とは違つてか!私は糸島軍規だ、
ここ地下一階を担当している。仲良くしてね」

『化け物生徒会長の姉こと黒神いるかです。仲良くするつもりはあ
りません!』

ズバツと言い切る。だつてこの人何か纏つてる雰囲気が既に怖いん
だもん。

「冷たいこと言つねえ。だがまあーさつきも言つた通り私は今機嫌
が良いんだ。早く通れよ

『……はあ

どうやらその言葉に嘘偽りはないらしい。機嫌がとても良さそう
である。良い歳した男が鼻歌歌つてどうよ。

『じゃあ、先に行かせて頂きます

そう私は階段に向かって つて。

『…何で着いて来るんですか』

「ん?そりゃあ暇だからだろ」

私の後ろにぴたり着いて来る糸島先輩。

「あー、十三組の十三人ってこんなテキトーで良いのか。……テキト
ーだから十三組の十三人なのか、理解。

「あー、忠告してやるよ黒神。三階はなあ、十三人の中で最強の女
の担当フロアだ！注意しておいた方が良いぜ？」

『最強の女？』

「えー、こんな早くからワスボスみたいな出る普通？しかも何で地
下三階なんだよ、中途半端な。

「わうわう。作られた異常で……つと、湯前か

『え？』

「あー糸島先輩じゃないですかー？びつしたんですか、こんなとこ
ろでー（棒読み）」

『どうつー』

会話していた私達の目の前に現れた、なんかもうワガママボーティと
いうか唯我独尊ボーティな女の子。胸が零れてらつしゃる……。わ
ーにしてねえしー！

「んー、とにかく誰ですかーこの子？」

「あー、理事長が前言つてたろ？十三人の候補だつてよ」

『……黒神いるかです』

ヤバい。これは善吉だつたら鼻血出して死ぬレベル。何でこの人裸なん? 何で下着無しで直にオーバーオールなん? 某配管工の赤いあの人�판なん?

「……可愛い」

むぎゅつ

『ぐむつー』

何かいきなり抱き締められたよ。何かめっちゃ頭撫でられてるよ。死ぬ。胸で死ぬ。くそつ、めだかと言い猫美先輩と言つてこの人と言い箱庭学園巨乳多すぎだろ理事長の趣味かよ。

いや、冗談無しで死ぬって。息出来ない。

「その辺にしてやれ。死にかけてるぞ」

「わーごめんねー（棒読み）」

『し、死ぬ……』

やつと解放された私。良かつた。

流石に死因：胸部による窒息死は嫌だ。

「コイツは湯前音眼。私と同じ十三人だ」

「仲良くしてね」

『…よろしくお願ひします』

すつつつ「こ」に遠慮したいです。しかし、それを口に出せない私を誰か褒めて欲しい。

「といひでお前は七階担当だろ? 何で「こんな中途半端な」といひこて冗談だ?」

どうやら湯前先輩は七階担当らしい。

後ろから私に抱きつき、そのけしからん胸を押し付けてくる湯前先輩。ガムを膨らませながら言つた。(どうひつて膨らませながら喋つて)いるのか…謎である)

「んー、理事長から呼び出し受けやつてー(棒読み)」

『あのHレベーター使えば良いんじゅうですか?』

七階から一階までとか面倒だらうに。何とかの扉(名前忘れた)を入つて直ぐのところにあつたあのHレベーターを使えば良いんじゅう?

けど、私の言葉を先輩一人は否定した。

「あのHレベーターは地下十三階から一階まで直通だから、移動は基本階段なんだー(棒読み)」

「それに、十三組の十三人の全員が使えるわけじゃないからな

えつ。使えないなら存在する意味無くない?

「いや、使えるのは私と湯前を含めた六人……裏の六人と呼ばれる、^{プラス・シックス}メンバーと雲仙だけだ。それ以外の十三人は開けることすら出来ない」

ちなみに十三階は都城が担当しているぞ、と糸島先輩。都城つて誰だよ。というか、十三階まで直通のエレベーターを十三階の担当者が使えなかつたら意味無いじゃん。結局存在してる価値無いじゃん。

「偉大なる王に扱えぬ物など無い」^{おれ} つてパスワード入力して結局駄目だつたんだよねー、都城先輩（棒読み）

「にひひひ、あれは傑作だつたな」

うわあ悲惨だわあ……。ちょっと見てみたかった気もするけど。

「じゃあまたねー」

後で七階にも来てねーと台詞を捨てて湯前先輩は上に行つてしまつた。あの人、理事長までの格好で行く気か？……まさかね！

『えーっと……何でしたつけ、地下二階の人。十三人最強の女？』

「ん？ああ、そうだ。補足するなら、お前が倒したであろう地下一階の高千穂は十三人最強の男だ」

……もしかして、これから出て来る十三人全員そんな肩書きがあるわけじゃないよね？十三人最凶の男ーとか十三人最怯の女ーとか。流石にちょっと勘弁してくれ。

「と言つても十三組の十三人に戦闘タイプの女子がいないからなあ」

『へー。どんな人がいるんですか?』

「十三人最強の古賀だろ?頭脳労働専門の名瀬だろ?体を液体にする湯前だろ?髪の毛伸ばせる筑前だろ?あと、何でも食べれる上峰だな」「

あー確かに戦闘向きではないなあ。

いやまあ、女子で戦闘向きってのもどつかと……つて上峰?」

『上峰つて……あの上峰ですか?』

「どの上峰かは知らんが、上峰書子。私のクラスメートで、あのHレベーターを使えるやつの一人だ」

『MJK』

MJKと書いてマジかと読む。じゃなくて書子たん箱庭学園に入学してたのか、初めて知った。

まあ、確かに書子たんぐらいの異常を理事長が勧誘しないわけないか。アフノーマル

……実際、私が箱庭学園に入ったのも理事長から勧誘されたからだしね。

「何だ、上峰と知り合いか?」

『中学の頃にお世話をなつたんですよ』

主に勉強面で。

と、そんなこと言つてゐる間に地下二階か。結構長いな。

「心して挑めよ黒神？さつきも言つた通り、十三人最強の女の担当フロアだ！」

『分かつてますつて』

茶化す糸島先輩を余所に、重苦しい扉に手を掛け扉を開けたらそこは

『…アニマルパラダイス？』

動物園でした。

第十三箱（後書き）

「偉大なる王おれに扱えぬ物などない」自信満々でパスワード入力

ブーツ！パスワードガチガイマス

「ほ、ほら、王土！王土の前ではエレベーターすらも屈服して機能を停止しちゃうんだよ！」必死でフォローする行橋

「あんだけ自信満々だったのに……ふつ」クスクス笑う裏の六人

まで妄想しました。

十三組の十三人は仲良しだと良いなあ。

結果発表

〆切をすっかり忘れてしていました。

早速ですが、この小説『黒神いるかの転生生活』のお相手、所謂落ちが人気投票にて決まりましたので発表いたします。

アンケート下位から発表させていただきます。

七位：希望ヶ丘水晶

不知火半袖

財部依真

与次郎次葉

鰐塚処理（同数一票）

六位：筑前優鳥（二票）

五位：志布志飛沫

平戸口イヤル

雲仙冥加（同数三票）

四位：古賀いたみ（四票）

三位：赤青黄

湯前音眼

江迎怒江（同数五票）

二位：大刀洗斬子

黒神めだか

安心院なじみ（同数六票）

1位・黒神くじら（七票）

ところづで、黒神くじらを中心には話を進めていきたいと思ひます。

平戸ロイヤルに投票した人は後で職員室に来るよう。

数多くの投票、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0860v/>

黒神いるかの転生生活

2011年9月7日18時35分発行